

オープンアクセスジャーナル (概要説明)



永井 裕子 (日本動物学会事務局長)

社団法人日本動物学会事務局長・UniBio Press 代表。

1993年より動物学会事務局長、現在に至る。専門はインド近代史。

オープンアクセスの定義

オープンアクセスの定義は理想的には、「学術的なデジタルコンテンツへの障壁なきアクセス」ということです。SPARC Japan では SPARC USA が国際・オープン・アクセス・デーと定めている10月14日に、国立情報学研究所でオープンアクセスに関連したセミナーを開催しました。

オープンアクセスの実現

オープンアクセスを何らかの形で獲得するために、今は、実際的な話に入っている段階だと考えます。オープンアクセスを実現するためにどうすればいいかということは、その方向性はほぼ定まったと言ってもいいと思います。ご存じの方には、幾度もになって恐縮ですが、オープンアクセスを実現するために Budapest Open Access Initiative では二つのことが推奨されました。一つはデジタルリポジトリ、自分のウェブサイトを含めたセルフアーカイビングで、もう一つの方向性としては、オープンアクセスジャーナルという選択でした。では、オープンアクセスジャーナルは、現在、出版物全体の5~6%に届いているかどうかという状況なのだと思いますが、私たちはオープンアクセスジャーナルについて、それはビジネスモデルのひとつであるという観点から、日本の学会出版は今後、よく検討しなければならないと考えます。

オープンアクセスジャーナルとは

平成19年の8月に大学図書館研究から出された、名古屋大学の三根慎二先生が書かれた『オープンアクセスジャーナルの現状』の中から引用させていただきますと、オープンアクセスジャーナルというのは、1) 学術的である、2) 従来の学術雑誌のように品質管理メカニズムを利用する、3) デジタルである、4) 無料で利用可能、5) 著者に著作権の保有を許可する、6) クリエイティブ・コモンズや同種のライセンスを利用するとされています。1)、2)、3) は電子ジャーナルにも当てはまることですが、特異的にオープンアクセスジャーナルにのみ該当するのが、4)、5)、6) で、これがオープンアクセスジャーナルの特色と言ってもよいのではないのでしょうか。

オープンアクセスジャーナルの現状

オープンアクセスジャーナルと Google に入れて検索すると、3番目ぐらいに出てくる URL が今、お話ししました、三根先生のオープンアクセスになっている論文の所在です。http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/dspace/bitstream/2237/10118/1/open_access_journal.pdf

これは名古屋大学図書館の機関リポジトリの中にデポジットされたものですが、私は、自宅にしながら、三根先生の論文を苦勞なく読むことができ、学術情報を得ることができた。これがオープンアクセスであり、三根先生によるセルフアーカイビングの結果ともいえるわけです。

オープンアクセスジャーナル5連型

三根先生の論文には、オープンアクセスジャーナルには五つの類型があるとされ、(図1)、慶應大学の倉田敬子先生もおなじように類型化されています。まず、非予約購読型と予約購読型の二つに分けて、非予約購読型には完全無料型と著者支払・読者無料型が当てはまり、予約購読型にはハイブリッド型、一定期間後無料公開型、電子版のみ無料公開型があるとされています。

オープンアクセスジャーナル5類型

- 非予約購読型
 - 完全無料型
 - 著者支払・読者無料型
 - 予約購読型
 - ハイブリッド型
 - 一定期間後無料公開型
 - 電子版のみ無料公開型
- 「オープンアクセスジャーナルの現状」大学図書館研究 80巻(2007.8)三根慎二表2より

(図1)

私たちは、これからオープンアクセスジャーナルをビジネスモデルとして持つということがどういうことか、よく考える必要があります。そこで考えなければいけないのは、オープンアクセス実現には、社会という概念から、考えますと、二つの要素が常に存在するという事です。第一には政治的な問題、つまり税金を使って研究がおこなわれるという現実から、納税者からのオープンアクセス化への要求や、研究費を配分する団体等のそれぞれの立場からそれにどう対応するのか、どう法制度を定めるのかという問題。またそれとは全く違う方向ではありますが、学会出版または商業出版社がオープンアクセスジャーナルをビジネスモデルとしてどう活用するのかといった問題、というより課題があると思います。本日のセミナーにお申し込みいただいた75名の方々が、それぞれのお立場でオープンアクセスを、そしてオープンアクセスジャーナルをどう考えるかが重要だと思いません。

では、なんのために

私たちのような学会出版にとって、論文をより多くの読者に読んでいただくために、オープンアクセスという形が有効なのか。学術論文は無料で制約のない、オンラインでの利用実現という形態が正しいのか。シュプリンガーが現在のビジネスモデルの代替としてBioMed Centralを買収したのはなぜか。納税者への科学研究還元のためという米国の主張は非英語圏の日本でも同様に意味があるのか。何のためにオープンにするのか、何のためにオープンアクセスジャーナルという形を取るのかということであらためて申しますまでもなく、我々ひとりひとりが考える必要があると思います。皆さまにもぜひお考えいただければと思います。